

# 在朝鮮日本人漫画家の活動について—岩本正二を中心に

高 晟 竣

## 1. 在朝鮮日本人漫画家研究の現状

これまでの韓国での漫画史研究では、李道榮(1884-1933)の先駆的な活動が韓国漫画史の嚆矢と捉えられており、また、1920年代に『朝鮮日報』紙上を中心に優れた漫画を発表した夕影・安碩柱(1901-49)らの活動は、内地での岡本一平(1886-1948)らの漫文漫画流行の影響を受けたものとされるのが一般的であった。<sup>1</sup>しかし、内地の漫画との具体的な影響関係については比較考察されることは少なく、また当時の朝鮮在住の日本人漫画家の活動については、あまり注意が払われてこなかった。このことは日本における自国の漫画史研究においてもあてはまることであり、解放前の朝鮮半島で活躍していた漫画家についての言及は、ほぼ皆無と言ってよい。<sup>2</sup>

当時広く日本人に読まれていた『京城日報』などの日本語新聞や『朝鮮公論』のような日本語雑誌には漫画が数多く用いられていたが、例えば、韓国の新聞漫画を概観した尹珉玉氏は、著書『韓国新聞漫画史1909-1995』の中で、大韓帝国時代、日帝時代の各新聞に連載された新聞漫画を網羅し、『毎日申報』、『朝鮮日報』、『東亞日報』などの朝鮮語新聞についてはそれぞれの連載について詳細に考察してはいるが、その一方で日本語紙の『京城日報』についてはわずか2ページの記述にとどまっている。<sup>3</sup>またその考察も、日本人の優越性を誇張し朝鮮人の非文明性を笑う風刺漫画、戦時中において日本人と日本軍の士気を高揚させる漫画が中心であるという記述のみにとどまり、作例もただ1点の紹介にとどまっている(図1)。筆名「多田生」が描いた「街頭所見」という漫画がそれであるが、この「多田生」とは京城日報社で美術記者を長年務め、京城の美術グループや朝鮮美術展覧会を舞台に活動した多田毅三(生没年不明)のことであり、『京城日報』紙上でも朝鮮美展の作品評論を記したり、「全鮮自動車漫画旅行」という連載もしている。多田は在朝鮮日本人美術家・漫画家としては大いに注目すべき作家であるが、残念ながらその出自や戦後の足跡を追うための資料は、現在のところ発見されていない。<sup>4</sup>



図1 多田毅三「街頭所見」2『京城日報』1924年7月25日

とはいえこの数年、朝鮮半島での日本人漫画家の活動についての研究も進んできており、その優れた例として、韓日比較文化セミナーが編集した『朝鮮漫画 100年前朝鮮漫画になる』(図2)がある。<sup>5</sup>この書籍は、当時は「鳥越静岐」と名乗っていた細木原青起(1885-1958)らによって1909年に制作された『朝鮮漫画』その他を翻訳して考察するもので、100年前の日本人漫画家が朝鮮をどう見たかというものが主要テーマとなっている。『朝鮮漫画』の作者である細木原青起は「東京漫画会」所属の漫画家であり、『京城日報』や雑誌『朝鮮』に漫画を描いていたものの、むしろ『東京日日新聞』や『大阪朝日新聞』など内地の新聞が活動の中心であった。細木原青起は、日本では初めての漫画の通史である『日本漫画史』を1924年に出版している。<sup>6</sup>



図2 鳥越静岐(細木原青起)・薄田斬雲『朝鮮漫画』京城:日韓書房, 1909年

本稿で考察する岩本正二(1912-?)は、細木原青起よりも一世代後の漫画家であり、朝

1 韓国漫画史の概説的な文献としては次を参照。최열『한국 만화의 역사 - 우리 만화의 발자취 일천년』, 서울: 열화당, 1995; 손상익『한국만화사 산책』, 과주: 살림출판사, 2005; 강수정『안석주와 만문만화』in: 국립현대미술관(ed.)『한국미술100년 1』과주: 한길사, 2006.

2 日本漫画史の概説的な文献としては次を参照。石子順『日本漫画史』, 東京: 社会思想社, 1988; 清水勲『漫画の歴史』(岩波新書), 東京: 岩波書店, 1991; 清水勲『日本近代漫画の誕生』(日本史リブレット), 東京: 山川出版社, 2001.

3 윤영옥『한국신문만화사1909-1995』(증보판), 서울: 열화당, 1995.

4 本稿執筆後、北海道立文学館の井内佳津恵氏の調査により、多田毅三の活動について手がかりが掴めるようになった。井内氏は、朝鮮に在住したモダニズム詩人・内野健児(のちプロレタリア詩人・新井徹)による『新井徹の全仕事』(1983)の中で、多田が詩人の内野健児と同郷の対馬出身であるという情報を発見。『新井徹の全仕事』によると、多田は内野と同郷のよしみで、詩集『土壌に描く』(1923, 大田)や詩誌『耕人』(1922-25, 大田)の挿画を手がけているとのこと。また井内氏の調査により、洋画家・奥瀬英三に宛てた年賀状が、跡見学園女子大学新座図書館に所蔵されていることが確認された。奥瀬英三資料一式の中に含まれていたこの資料の調査(2013年10月31日)に際しては、うらわ美術館の島田有美子学芸員、跡見学園女子大学図書館の貴堂直図書館課長および菊地秀明主任からのご協力を得ることができた。記してここに感謝の意を表したい。

5 한일비교문화세미나(ed.)『조선만화 100년전 조선 만화가 되다』, 서울: 어문학사, 2012.

6 細木原青起『日本漫画史』東京: 雄山閣, 1924.

鮮で生まれた在朝鮮日本人二世ということになる。『京城日報』で漫画や挿絵を描いていた細木原、さらには鶴田吾郎(1890-1969)や前川千帆(1889-1960)らは、結局数年で内地に戻った一時的な滞在者に過ぎなかったが、<sup>7</sup> 1945年まで継続して朝鮮に滞在した岩本正二の場合は、以下で示すとおり、一時滞在者とは異なる在朝鮮日本人としてのアイデンティティを持っていた。本稿では岩本の経歴を追い、作品の変遷を詳細に見ていくことになるが、これによって、これまで研究がなされてこなかった1930-40年代の在朝鮮日本人漫画家の活動への理解が深められるであろう。

## 2. 岩本正二の生い立ち

岩本正二の名前は、『京城日報』および『朝鮮公論』に漫画家・挿絵画家として登場する。とりわけ『朝鮮公論』においては、漫画や挿絵画家のみならず文才を活かして数々のエッセーを執筆してもおり、朝鮮公論社の記者という性格もある。<sup>8</sup> そして戦争中は『京城日報』の小学生向け新聞である『京日小学生新聞』(図3, 4)で漫画等を担当していた。



図3 『京日小学生新聞』1940年10月27日 第1面



図4 岩本正二(画)「チビ哲物語」『京日小学生新聞』1940年10月27日

『京日小国民新聞』と題していた時期もある『京日小学生新聞』は、現物がほとんど残っておらず、残念ながら当時の漫画を系統立てて考察することはできなかった。しかし、解放後の韓国を代表する漫画家である金龍煥(1912-88)氏は、同時代人として『京日小学生新聞』の漫画家たちを回想し、その活動に注目しつつ、韓国漫画史の重要な一コマとして位置付けている。<sup>9</sup> 金龍煥氏自身は、解放以前は「北宏二」という筆名で『少年倶楽部』など内地の少年向け漫画を描いていた。

また、貴重な証言としては、岩本正二と京日小学生新聞編集部で同僚であった神林久雄(1918-2010)氏による自伝がある。<sup>10</sup> 『ゼロからの出発』と名付けられたこの書籍において、小学生新聞編集部に新しく集まった人物として名前が挙げられているのは、岩本正二、神林久雄、秋吉巒(1922-81)で、洪在善という朝鮮人も紹介されている。またこの書籍によると、小学生新聞での仕事は、政治、社会、国際問題などの記事を、少年向けに分かりやすく書き直して掲載したり、子供たちへの作文の投稿呼びかけ、学校の行事などの取材もあったという。

神林久雄、秋吉巒については、この自伝、そして秋吉のご子息が出版した画集によってその足跡をたどることができる。<sup>11</sup> 終戦後は、神林はプラモデルや工業製品などのデザイナーとして活躍し(図5)、秋吉は風俗雑誌の表紙絵を手が



図5 神林久雄「ミサイル潜水艦」ヤマガ模型

7

鶴田吾郎と前川千帆の名は、『京城日報』と『朝鮮申報』を研究対象にした次の論文においても、美術記者として紹介されている。咸苔英「1910年代朝鮮総督府機関紙と徳富蘇峰」『アジア文化研究』37(2011), pp.95-119

8

『朝鮮公論』は総目次が刊行されている。한일비교문화연구센터(ed.)『조선공론 총목차 인명색인』, 서울:어문학회, 2007. 『朝鮮公論』の277号(1936年)以降、岩本は「本誌記者」「本誌特派員」という肩書で登場する。

9

金龍煥「韓国の漫画」『親和』163(1967), pp.18-22.

10

神林久雄『ゼロからの出発』, 東京:文芸社, 2007.

11

秋吉裕一(ed.)『illusion幻想画家秋吉巒の世界』, 東京:文芸社, 2000.



図6 秋吉憐「風俗草紙」1953年9月号 表紙絵



図7 岩本正二「男の子というものは『少年の町2』東京三共図書、1956年



図8 岩本正二「船のはかばサルガッソー」『こども科学館』20(1962年)

12  
岩本正二『少年の町2 あたらしいなかま』東京:三共漫画、1956。

13  
岩本正二「バビロンの庭園」「舟のはかばサルガッソー」『こども科学館』20(1962), pp.28-29, 38-41。

14  
岩本善併・岩本正二「京城漫談風景」『朝鮮公論』220(1931), pp.95-98; 岩本正二「漫・描・顔」『朝鮮公論』220(1931), pp.99-101。「京城漫談風景」は223号、「漫・描・顔」は225号まで連載された。

15  
次の記事には「僕今年二十一」とあることから、生年は1912年であることが推定できる。岩本正二「時事漫談」『朝鮮公論』240(1933), pp.91-94。

16  
次の著書の序文から情報を得た。岩本善文・久保田卓治『北鮮の開拓』、京城:北鮮の開拓編纂社、1928。岩本善文の古代史の著作としては次のものがある。岩本善文『朝鮮から見た日本の古代』、京城:東方文化研究会、1926。

17  
岩本善併「父・善文を語る」『朝鮮公論』219(1931), pp.311-315。

18  
岩本正二「漫・描・顔」『朝鮮公論』220(1931), pp.99-101。岩本善併の前掲記事にも、父・善文が弟・正二へのメッセージということで、次のように語られている。「社会に公表するなら、注意して描くが好い。漫画をやれば、人の似顔が速度にかけられる様に練習する必要がある。今度僕が出獄したら皆、子の教育丈に一生を捧げるつもりだ。偉い者になって呉れよ」



図9 岩本善併・岩本正二「京城漫談風景」『朝鮮公論』220(1931年)



図10 岩本正二「漫・描・顔」『朝鮮公論』220(1931年)

ける画家として活躍することになる(図6)。しかし岩本正二については、神林および秋吉のご息に伺ったところ、関連資料は残っておらず、連絡先も現在では不明とのことであった。数少ない戦後の資料のうち集めることができたのは、貸本屋用の漫画<sup>12</sup>(図7)および子供向けの科学雑誌の挿絵<sup>13</sup>(図8)のみであった。

岩本正二が漫画家としてデビューするのは1931年のことで、『朝鮮公論』220号の紙面上であった。兄である岩本善併との共著で京城風俗を風刺し(図9)、また似顔絵付の漫文漫画と同じ220号に描いている(図10)<sup>14</sup>。『朝鮮公論』への初投稿は、岩本が19歳の頃であったが<sup>15</sup>、このデビューには、どうやら父である岩本善文が大きくかかわっているようである。

岩本正二の父・岩本善文は社会人になって咸鏡北道に出向し、また京城で学んだ後は早稲田大学に内地留学している<sup>16</sup>。また古代史についての著作を執筆し、東京の新聞『萬朝報』の記者をしていた。兄の善併によると、善文は「或る事件に関連して」麻浦刑務所に服役中であり<sup>17</sup>、おそらくは善文の関係者が息子二人に仕事を斡旋した結果が『朝鮮公論』の漫画制作であると考えられる。

岩本正二は、「漫画家になるなら、人の似顔が即席に描けるようにならなくては」と、父からアドバイスを受けたと述べているが<sup>18</sup>、これは岩本善文が『萬朝報』の記者として働

いていた時代に、この新聞の漫画記者と親しく接していたゆえのアドバイスであったろう。実際に日本で漫画記者という職業は、当時の印刷技術の限界から、写真の不鮮明さを補う意味で、似顔絵などを描くことを主目的として新聞社に雇われはじめた新しい職業であり、岡本一平は『東京朝日新聞』、岡本の東京美術学校時代の同級生であった近藤浩一路(1884-1962)と池辺鈞(1886-1969)はそれぞれ『読売新聞』と『国民新聞』というように、新聞紙上で漫文漫画を描いて活躍した。<sup>19</sup> 池部鈞の場合は、東京美術学校を出てからは京城日報社に就職しており、程なくして国民新聞社に転職している。『萬朝報』の漫画記者としては清水対岳坊(1883-1970)がいたが、おそらくは岩本善文と清水対岳坊には面識があったのではないかと考えられる。

岡本一平は、1915年に漫画記者の団体である「東京漫画会」を結成しており、ここでは新聞社所属の漫画家たちが集って活動をしていたが、彼らは京城にも何度も訪れており、京城駅や京城三越で漫画の展覧会や即席の漫画制作などを行っていた。<sup>20</sup> 『京城日報』の紙面でも、「東都漫画団来月中旬入城」という記事に、岡本一平、山田みのる(1889-1925)、服部亮英(1887-1955)、北沢楽天(1876-1955)、在田稗(1890-?)、森島直造(生没年不明)、池辺鈞、前川千帆、清水対岳坊、細木原青起、柳瀬正夢(1900-45)、代田取一(1880-1958)、幸田純一(生没年不明)、宮尾しげを(1902-1982)、宍戸左行(1888-1969)、牛島一水(生没年不明)、下川凹天(1892-1973)、近藤浩一路、木山火山(生没年不明)、池田英治(1889-1950)、中島立次(生没年不明)、水島爾保布(1884-1958)の名があがっているが、これはほぼ「東京漫画会」のメンバーと重なっている。また、1928年、1933年にも京城で展覧会を開催しているが、こちらは「東京漫画会」を継承した「日本漫画会」が主催となっている。<sup>21</sup>

岩本正二については、体系的な美術教育を受けた形跡がない。それどころか、朝鮮公論社の記者になるまで、内地を訪問したことが一度もなかった。<sup>22</sup> しかしおそらくは、京城で開催された東京漫画会の展覧会を見学したことはあるだろうし、あるいは父の岩本善文を通して清水対岳坊らと親しく接することができた可能性もある。また、『京城日報』に掲載された多田毅三の漫画や、在田稗が編集した『スター漫画漫談(日本欧米映画俳優似顔漫画集)』<sup>23</sup> のような書籍を参考にしたことも考えられる。

以下で分析するように、漫画を描く際の岩本の作風は岡本一平や清水対岳坊に近いが、新聞や雑誌の挿絵を描く際には、作風をがらりと変えて劇画調になっている。また、画家でもあり朝鮮美展の批評もしているが、朝鮮美術展覧会の入選者名簿に岩本正二の名前は見つけることができなかった。<sup>24</sup>

### 3. 岩本正二の漫画に見られる様式変遷

岩本正二が朝鮮で漫画家として活動していたのは、1931年から1945年までの14年間であるが、デビュー当時の1930年代初頭頃の様式と、1930年代後半以降の様式はかなり異なる。また、漫画ではなく、新聞小説等の挿絵を描く際には、意図的に描写方法を変えていたようである。

初期の連載である「京城漫談風景」は、岩本善併・正二兄弟が京城府内で眼にした様々な光景を風刺するというものであるが、第1回目の連載では、「外国人がゲイシャ・ガー

19  
当時の漫画記者およびその団体である東京漫画会については次を参照。湯本豪一「東京漫画会―岡本一平を中心に」in:東京文化財研究所(ed.)『大正期美術展覧会の研究』東京:東京文化財研究所, 2005, pp.357-371. 岡本一平に関しては次の文献も参照。清水勲・湯本豪一『漫画と小説のはざま―現代漫画の父・岡本一平』, 東京:文藝春秋, 1994; 清水勲(ed.)『岡本一平漫画漫文集』(岩波文庫), 東京:岩波書店, 1995. 『萬朝報』の投稿者および漫画記者については次を参照。吉崎真弓『「萬朝報」の「端書ボンチ」―1907年から1916年までの主題の傾向と常連投稿者』『近代画説』17(2008), pp.20-37. 吉崎氏の調査によると、『萬朝報』に「画報部」が設立されたのは1898年のことだという。

20  
岡本一平は朝鮮を題材にした漫画単行本も手がけている。岡本一平『朝鮮漫画行』神戸:山邑酒造, 1928 [now in: 『一平全集』, 東京:大空社, 1990-91, vol.8, pp.283-317].

21  
『東都漫画団来月中旬入城』『京城日報』1923.8.29. 1928年、33年の京城来訪については次を参照。『漫画家、大挙来る』『京城日報』1928.5.15; 『漫画団京城へ向ふ』『京城日報』1928.6.13; 『駅楼上の漫画展』『京城日報』1928.9.21; 『東京漫画人の漫画展 13日から三越に開く』『京城日報』1933.6.11. これらの記事は、井内佳津恵氏の研究を出発点として集めることができた。井内佳津恵『美術家と朝鮮―「京城日報」の記事を通して』『紀要』(北海道立近代美術館他)2007, pp.69-106, 2008, pp.3-29, 2009, pp.5-41.

22  
次の記事が初めての内地旅行記である。岩本正二『野田醬油旅行団随記』『朝鮮公論』, 277(1936), pp.95-107.

23  
在田稗(ed.)『岡本一平外九漫画家執筆 スター漫画漫談(日本欧米映画俳優似顔漫画集)』東京:緑蔭社, 1927.

24  
岩本正二の朝鮮美展評には以下のものがある。岩本正二『鮮展観 東洋画と西洋画に於ける』『朝鮮公論』, 267(1935), pp.88-95; 『鮮展及び朝鮮画壇を側面より打診する座談会』『朝鮮公論』, 290(1937), pp.69-80; 『鮮展・画壇・画家』『朝鮮及満洲』, 390(1940), pp.69-71. 『朝鮮公論』の240号(1933)の「時事漫談」では、「鮮展が近くなった。絵書きは忙しくなる。僕も原稿料をためて絵具を買うしよう。」と述べている。



図11 岩本善併・岩本正二「京城漫談風景」  
『朝鮮公論』220(1931年)(図9部分)



図12 岩本正二「京城漫談風景」(3)  
『朝鮮公論』222(1931年)

ルで日本を憶ふなら、キーセン・ガールで朝鮮を憶ふだらう」と、ステレオタイプな朝鮮イメージを風刺している善併の漫文に、弟の正二は「朝鮮」と書かれた輿を担ぐ妓生をユーモラスに描いている(図11)。また、連載第3回目では、京城の市電の中でお腹を下し下痢を我慢している中学生が、女学生たちの金切り声に耐えながらも一刻も早く下車したがっている様子を描いている(図12)。この「京城漫談風景」においては、一貫して細い均一の太さの描線が用いられている。また、滑稽さを強調するためのデフォルメは用いられず、文章の説明として過不足ない簡潔な表現に仕上がっている。全体として平面的な描写であり、周辺の活字とうまくマッチしていると言えるであろう。

やはり初期の連載である「漫・描・顔」でも、やはり同様の均一の描線を用いて、最小限の描写によって、描かれる対象の本質を掴もうとする努力が見て取れる(図10)。このような均一の線による簡潔な描写は、岡本一平がドイツの漫画雑誌『シンプリチシムス』の影響を受けて1923年に『東京朝日新聞』紙上に描いた「しんぷりしちずむ」<sup>25</sup>を想起させるが、岩本正二の漫画の場合はそこまで簡潔化されてはおらず、大幅なデフォルメもない。また、この二つの連載では、岩本正二は「S.IWA」というサインを用いていた。

「京城漫談風景」、「漫・描・顔」と同じく1931年に『朝鮮公論』で連載が始まった、春海

浩一郎の小説『憑魔の壺』の挿絵も岩本が手がけているが(図13)、この挿絵においては、線ではなく面を中心としており、極端な明暗法が用いられ、イリュージョニスティックな空間表現が用いられている。サインは「S.IWAMOTO」とあり、油彩などのタブローを意識していることが見て取れる。このような極端な明暗法や空間表現は、1933年に『京城日報』で連載された川路柳虹の小説『翼なき鳥』(図14)の挿絵におい



図13 春海浩一郎・文／岩本正二・画『憑魔の壺』(1)『朝鮮公論』224(1931年)

でも用いられており、さらに時代が下った1940年、『京日小学生新聞』に連載された林タテヤスの児童文学『チビ哲物語』の挿絵(図4)においても、より簡潔な表現になってはいるものの、依然として用いられて



図14 川路柳虹・文／岩本正二・画『翼なき鳥』(24)『京城日報』1933年6月11日

25  
清水勲・湯本豪一前掲書, pp.140-141.

いる。漫画と挿絵では、意識的に様式を使い分けている様子が見て取れる。

再び話を漫画に戻すと、岩本は1936年以降、『朝鮮公論』の表紙見返しに時事漫画を連載するようになるが、この頃の様式は、初期の均一な描線を中心としたものから明らかに変化している。「時事漫談」あるいは「時事漫態」というタイトルが付された連作であるが、ここでは三面記事的なエピソードや社会・国際情勢を風刺した漫画が登場する。1936年の277号の「時事漫画」(図15)では、大阪へと旅立つ子供に対して親が要らぬおせっかいをしたために、逆に悪者に狙われてしまったという話を、やはり簡潔な線で描いている。しかし、この頃の線は、当初のような均一な描線ではなく、太い描線を併用しながら陰影をうまく表現している。ペンの筆圧を変えながら線の濃淡を用いて対象の本質を掴むこのような描法は、清水対岳坊がよく用いていた描法であるが、<sup>26</sup> 岩本正二も色々と試行錯誤しながら、このような描法を身に付けていったと思われる。



図15 岩本正二「時事漫画」『朝鮮公論』277(1936年)

284号の「時事漫態」(図16)では、愛国婦人会の活動をユーモアあふれる漫画で表現しているが、半裸の女性の描写では、描線の太さを使い分けた表現が秀逸である。287号の「うなぎのぼり」とタイトルが付された漫画(図17)では、物価上昇のグラフで比喻表現として用いられる「うなぎのぼり」という言葉を実物のウナギで表現しているが、ウナギを捌もうとする料理人の焦る様子が、やはり描線のメリハリによって巧みに表されている。



図16 岩本正二「時事漫態」『朝鮮公論』284(1937年)



図17 岩本正二「時事漫態」『朝鮮公論』287(1937年)



図18 岩本正二「四方八方の話」『朝鮮公論』351(1942年)

のメリハリによって巧みに表されている。

1942年以降の岩本は、『朝鮮公論』では「四方八方の話」という漫画を連載するが、この頃は太平洋戦争に突入しており、岩本の論調も「鬼畜米英」や「内鮮一体」をテーマにした軍国主義的なものになっていく。漫画の描法は、濃淡のある太い描線を用いていた1930年代後半の描法がさらに発展している。『朝鮮公論』351号の「四方八方の話」(図18)では、市電の中で新聞を読む朝鮮人青年を描いているが、これは日本人と同様に朝鮮人も太平洋戦争に真剣に向き合うようになったことを礼賛するという趣旨の漫画である。同じ市電の車内風景を描いた1931年の「京城漫談風景」の漫画(図12)と比較してみるならば、両者の描法の違いは明らかである。また、この頃は「しゃうじ画」というサインを入れている。

26

前述のとおり、京城では何度も著名漫画家の展覧会が開催されており、在田稔(ed.)前掲書のような、複数の著名漫画家の作品を集めた作品集も刊行されていた。この作品集を見る限り、10名の漫画家の作風の中でも、清水対岳坊の描法が、この頃の岩本の描法に最も近い。



戦後の岩本正二の活動については、前述した少年漫画や子供向けの科学書の挿絵程度しか資料は集まらなかったが、神林久雄氏の自伝によると、神林氏が東京・九段に移り住んだ際、岩本正二、秋吉巒といった京城日報時代の仲間が訪ねてきたことがあったという。<sup>30</sup> 漫画家に限らず在朝鮮日本人作家は、戦後はそのキャリアが強制的にリセットされ、歴史の中に埋もれてしまう例が多かったが、今後のたゆみない調査を通じて、彼らの活動を再検証していきたい。

最後になるが、このテーマでの調査を勧めて下さった徳成女子大学の金炫淑教授、本調査にご協力を賜った秋吉裕一様、神林光二様に感謝申し上げますと共に、調査の中間報告とさせていただきます。

(新潟県立万代島美術館 主任学芸員)

30  
神林久雄前掲書, p.96.